

## アメリカ NPO ボランティア 体験学習プログラムについて

今年度で4回目の実施となり、サービス・ラーニングの要素を取り入れた形態での実施は3回目となる本プログラムは、「貧困」「マイノリティ」をテーマに、文献購読、フードバンクでのボランティア活動参加、講義と、それぞれレポート作成及びグループワークなどの事前学習を経て、アメリカ西海岸のサンフランシスコ、バークレーで共同生活を送りながら、現地 NPO でボランティア活動に参加する。アメリカではボランティア活動だけではなく、カリフォルニア大学バークレー校やサンフランシスコ州立大学でのクラス参加や各種学習的フィールドトリップ、英会話レッスン、毎日の振り返りや評価ミーティングなども行い、帰国後は、報告会での発表と報告書作成を通じて、参加学生が得たそれぞれの「学び」を学内にフィードバックする。

本プログラムは、以上のような約半年間の国内外における過程を通して、参加学生たちが思考力、行動力、発信力、コミュニケーション力、語学力などの様々な社会現場で貢献できる基礎的な総合力を身につけることを目指しており、プログラム終了後に社会の様々な現場で活躍することを期待している。なお、前年度に続き、アメリカでの受け入れは日本太平洋資料ネットワーク（以下 JPRN）の事務局長である野房あかね氏に依頼しており、野房氏の協力を得ながらプログラム担当者である筆者（以下筆者）が全体をアレンジしている。

当プログラムは実施期間が12月から6月であるため、本書でプログラム全体を報告することができないが、本稿では1. 2007年度プログラム（2007年12月～2008年1月の内容については「明治学院大学ボランティアセンター報告書第4号（2007）」参照、本文では2008年2月～2008年6月までを報告）、2. 2008年度プログラム（2008年11月～2008年1月現在までを報告）について扱う。

### 1. 2007年度プログラムについて

事前課題や事前準備を経て、参加学生は2007年2月14日、アメリカ、サンフランシスコ・バークレーへ向けて出発した。そして2007年3月1日に全員が無事に帰国した。そして早速3月8日に帰国後ミーティングを行い、参加者全員で行うグループ発表について議論し、学生たちでテーマ、方法、役割分担、報告会までのタイムスケジュールについて決めた。その後、報告会の準備を進めながら、筆者が参加学生たちと個別にカウンセリングを行った。これによって、現地での様子を確認しながら客観的に整理し、報告会の個人発表で取り上げる内容の焦点を絞り、報告会までのタイムスケジュールを具体化した。こうして報告会に向けた方向性を整理したのち、学生たちは5月の連休明けまで個人発表の準備に励んだ。プレゼンテーションの経験がない、パワーポイントを使うことも初めてという学生もいたが、彼らが最も格闘したのは、不特定多数の聴衆に対して、限られた時間内に自分のオリジナルな考えを届けるプレゼンテーションを作れるかという点だった。しかし何度も試行錯誤を重ねながら各々が準備に取り組ん

だ。そうして4月19日、初めて予演会を行った。緊張と失敗の連続の中で自分の発表を行い、仲間たちからアドバイスをもらい、そして自分もアドバイスをするために必死に傾聴する、という時間は、学生たちにとって何よりのPeer Education になったと考える。こうして皆で新たな課題を明らかにし、共有することで、次のステップであるグループ発表に向けた準備を始めた。在籍学科学年、校舎もバラバラの中で全員が主体的に時間を調整し、捻出した。5月の連休明けには、毎週末全員で予演会を行った。こうした準備を経て、5月22日、学長をはじめ、学内の教職員や学生、学生の家族や友人たちを聴衆に迎えた報告会を白金校舎で行った。今回も、学生たちの着眼点は非常にユニークだった。女性ホームレスの事例を通して、参加者中唯一の男性だった自分を事例にマイノリティ問題を考察し、気づきの大切さや意味について提案した学生、在日外国人問題を犯罪率から考え、「みんなちがってみんないい」という金子みすずの詩の意味を考察した学生、バークレーの障害者自立運動と日本の障害者自立運動について調べ、当事者が声をあげていくことと、周囲の気づきと理解の重要性について考察した学生、今回のプログラムを通じた出会いを通じた自分自身の成長について考察した発表、このプログラムで初めてNPOに出会い、「無償」以外の「意味」を考察した発表、そもそもボランティアとは何だろう、と本学の建学の精神であるDo For Othersとも併せて考察し、視野を広げる、世界を広げるという側面からボランティアについて語った発表、自分の住む街について調べ、社会の一員としての自覚と行動について考察し、本学の学生に向けたメッセージを提案した学生など、多岐にわたった。全ての発表において共通したのは、程度の差はあるものの、全ての学生が「足で稼いで」創りあげた発表であるという点である。全員が自分の言葉で発信する重みと責任を感じ、それが発表製作の過程で行動として現れたと考える。それは筆者のもとへ何度も何度も足を運んだり、紹介してもらった役所の方やNPO代表の方にアポイントを取ってインタビューに訪れたり、NPOの活動に参加した上でアンケートをお願いしたり、明学生を対象に調査をしたり、いくつもの文献を調べたり…しかしそれらの「材料」を、9分間という発表時間にまとめる難しさにおぼつかり、パワーポイントを何度も作りなおしたり、結局その材料を全て使うことができなかつたり…。学生たちは、このような過程でいくつもの現実を学んだと思う。今回の報告会ではこれらが一番の成果であると考えているが、一方で、プレゼンテーション後までの余裕がなかったため、ほとんどの学生たちは質疑応答の際に頭が真っ白になって答えることができなかつた。しかしそれも含めてプログラムであると考えている。実際、学生たちはその悔しさをバネに、白金校舎での報告会のリベンジを果たすべく、横浜校舎で学生主催の報告会を開催した。そこでも、会を主催し、運営する難しさと魅力について学ぶことになった。報告会終了後は、報告会で個人発表した内容をもとに、報告会までの経験や学びなども新たに加え、執筆要綱にしたがって報告書を執筆した。一瞬で終わるプレゼンテーションと違い、文書として残る形での表現方法に再び学生たちは葛藤したが、添削を経て報告書が完成した（報告書は別冊『2007年度アメリカNPOボランティア体験学習プログラム参加学生による報告書』を参照）。こうしてようやく約半年間にわたるプログラムが全て終了した。

当プログラムの「本番」は渡米後、つまり「体験後」であると位置づけているが、プログラム自体は、プログラム終了後に参加学生たちが実際の社会現場に出かけていくことを期待している。この点から、今回の参加学生の中で特筆すべき例がある。今回の参加者に男子学生は1名しかいなかったのだが、彼は参加当初から、ジェンダーバランスと葛藤しながら、自身の成長を目指してプログラムに参加してきた。そんな彼が、5月の報告会を控えた4月、報告会の相談の際に、5月25日に白金校舎近隣で開催されるシロカネ・ストリートフェスタ<sup>1)</sup>を偶然知った。帰国後から高い志を持ち、Social Action について常々考えていた彼は、フェスタに参加したいと考えたのだが、彼は横浜校舎で4年間過ごす国際学部在籍の学生だった。そこで手作りキャンドルを販売するブース出店として参加することを考えた。自らフェスタ主催団体の志田町倶楽部の学生チーム運営委員になり、白金地域の方々、白金校舎在籍の学生たちともコミュニケーションをとりながら、横浜校舎での活動を展開した。彼が実行した Social Action の説明として、彼が「MG natural」<sup>2)</sup>で執筆した文を紹介する。

私たち「つながりろうそく倶楽部」は、留学生を含む明学生から白金高輪地区へ、最終的にブルキナファソとの間に「つながり」という意識のネットワークを作り上げることを目的として出店しました。今回の出店に際して、キャンドルの原材料となった蠟は寺社やホテル等から無償寄付していただき、また無償で多くの学生が企画・製作に関わりました。ブルキナファソの平均識字率が世界でも最下位に属し、子どもたちが3人で1人分の文房具を共有している現状を憂慮し、利益は彼らへの文房具費用として寄付しました。私たちの活動により、ブルキナファソへの関心が少しでも高まり、日本一ブルキナファソ間の新たなつながりができればよいと思います。

前年度はプログラム終了後にこのような動きがあったが、今回はプログラム中に、しかも一番忙しく困難な時期での挑戦だった。今回の例は学生自身にとっても自信につながったと思うが、彼の行動は、限られた時間内で今まで誰も越えることができなかつた校地の距離を越えて、ここまでできるということのを他の学生に実証した大きなインパクトだった（実は彼は別の団体の実行委員も同時に引き受けていた）。ボランティアの語源について火山（Volcano）に例える場合がある。若い学生の中で活火山のように自らの中から沸き起こる「自由で自発的な社会貢献活動」を通して、社会の未来と希望を支える一助として活躍してくれることを期待している。その踏み台として当プログラムはありたいと考えている。

## 2. 2008年度プログラムについて

プログラムの継続性と発展性という点から、前年度はプログラムの位置づけと役割を明確にするという構造的問題を解決することが、検討課題としてあがったが、ようやく今年度、大学として正課プログ

<sup>1)</sup> 詳しくは本書「I. 2008年度活動報告 白金校舎ボランティアセンター報告」を参照。

<sup>2)</sup> 詳しくは本書「I. 2008年度活動報告 白金校舎ボランティアセンター報告」を参照。

ラムとして位置づけることが可能かどうかという点から議論してもらえる場(学長の諮問による委員会、委員長はボランティア担当副学長)が立ち上がった。しかしながら、すぐに方針が決定するわけではない。プログラムの費用的な問題とそれに伴うアメリカ滞在期間短縮とプログラムの質の低下に対する懸念と、授業のような強制力がない状況での参加者たちのモチベーションを約半年間維持する難しさ、学部と在籍校舎が異なる学生たちのミーティングや予行練習会などの場所と日時のアレンジと確保が難しく、何よりもこのような不安定な予定の中でのプログラム進行は参加学生自体が参加しにくい状況となっている問題がある、といった具体的な課題に対して、今年度は現場担当者レベルで工夫して乗り切らざるを得ない状況となった。そこで、前年度までの成果と課題を改めて振り返り、新たに内容を再編成した。まず、参加学生たちが負担できる費用の面から、現地でのプログラムのクオリティを落とさず、前後の日本でのプログラム内容との相乗効果の点から過去の実績と経験をもとに検討を重ねた結果、今回は参加者を15名とし、アメリカ滞在期間を3週間に設定した。前年度に続く学生たちへの周知問題、応募状況の懸念に対しては、広報期間を十分取り、白金・横浜ボランティアセンターにおいて、スタッフが来室する学生一人一人に丁寧に説明をしたり、ボランティア学の授業でアナウンスの機会を頂戴したり、といった地道な広報活動を展開した。また、2006年度、2007年度の参加学生が、学内説明会においてプレゼンテーションを行ってくれたおかげで、説明会を3回開催することができた。また、2007年度参加学生たちがプログラムの概要と魅力について5分のムービーを製作してくれたおかげで、説明会のみならず、日常のボランティアセンターでの広報手段としておおいに活用させてもらった。その甲斐あって定員以上の応募があり、書類選考とグループ面接を経て15名の参加者を決定した。内訳は1年生が3名、2年生が12名である。今年度は自分の意思をしっかりとっており、向上心旺盛な学生が多い印象を受けた。肝心のコンテンツについては、今年度は「貧困」「マイノリティ」をプログラム・テーマとしてより明確に掲げた。それによって、渡米前の事前学習内容をピンポイントに絞り、アメリカで参加するボランティア活動内容も事前学習内容にリンクさせることができ、全体の流れを統一できた。事前学習の充実化にあたり多大なる協力を賜ったのは、前年度からお世話になっている、NPO法人セカンドハーベストジャパンである。具体的には、2008年に発刊された図書(「フードバンクという挑戦—貧困と飽食のあいだで」大原悦子著、2008岩波書店)を指定文献として文献購読とレポート課題を設定した上で、団体理事長であるチャールズ・E・マクジルトン氏と事務局長である和田裕介氏を講師に招いた講義を設定した。文献で予習をしていたおかげで更に情報がインプットされ、質疑応答を通して、机上の学びをより自分のものにすることができた。その上で、次は実際のボランティア活動に参加させていただいた。寄付された食品を実際に手にとって配給できるように準備するところから始まり、それを上野公園で5~600人の人々に配り、後片付けまで参加させていただいた。更に、ご好意でチャールズ氏を交えた振り返りまで設定していただけた。そしてこれら3つの事前学習に対してレポート作成(提出物は全員で共有)し、これらを題材にグループワークを行った。ここでは3つのグループに分かれて

ディスカッション、まとめ、発表、質疑を受ける、といったプロセスを経験してもらった。そのおかげで、学生たちは「まだ1ヶ月しかたっていないけど、とても充実しています」、「これまでボランティアをする時どうしても相手に何かをしてあげたいという厚かましい思いを抱いていたと思うが、そんな考えを持つこと自体間違いで自ら壁を作ってしまったと思った」、「自分がいかに狭い環境で生きてきたのか、メディアを通して“貧困”を知っているつもりでも何も分かっていなかったことを思い知らされた。社会制度の充実を望むだけでなく、自分の出来るところから支援を続けたいと思った」、「色々注文やクレームを言うホームレスの人たちに理解できず苦しい思いもしたが、感謝されたいと思っている自分に気づいた。そんな気持ちはやってあげてるという気持ちからくるものだし、対等な関係が崩れてしまうと思った」、「ボランティア当日は天気が良かったが、雨天決行とされていた理由がわかった。あれだけの人が待っていたら簡単に中止できないと思った。セカンドハーベストジャパンはこのような人たちの命綱といえるだろう」、「平等に配ること、ボランティアが直接手渡すことが大切だと思っていたので、“好きなものを3つ持って行ってください”という方法に戸惑ったが、チャールズさんの“選択できる幸せ”という考えを聞いて目から鱗だった」、「一人よりもの人々との交わりの中の方がたくさんのアイデアをもらえることが分かった」、「自分の考えをまとめ、発信する難しさを知ったが、そうできることを目指したいと思った。皆（他の参加学生たち）すごい。刺激をもらってる」など、具体的でいきいきとした言葉を紡ぎだしている。この流れを今後、アメリカの野房氏に託すが、今回のアメリカでのプログラム内容も、フードバンクやスープキッチンに絞っており、それをベースにバークレーの多様な社会の形、人々の形を目の当たりにしてもらうように設定している。本稿を執筆している現在はプログラム開始から1ヶ月半程度で渡米を控えている状況だが、前年度以上に手ごたえを感じている。参加学生たちの可能性を引き出せるよう全力でサポートしたいと考えている。

#### 2008年度アメリカNPO ボランティア体験学習プログラム概要

日程	実施内容
第1回オリエンテーション：11/29@白金	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プログラムスタートオリエンテーション</li> <li>・ 課題の伝達               <ul style="list-style-type: none"> <li>① 指定文献「フードバンクという挑戦—貧困と飽食のあいだで」大原悦子著、2008、岩波書店、の購読とレポート提出)</li> <li>② 自己紹介文提出</li> </ul> </li> </ul>
第2回オリエンテーション：12/15@横浜	ゲスト講演：特定非営利活動法人セカンドハーベストジャパン（講演後レポート提出）
第3回オリエンテーション：12/20@浅草橋	渡米前ボランティア活動への参加と振り返り：特定非営利活動法人セカンドハーベストジャパン（活動後、レポート提出）
第4回オリエンテーション：1/10@白金	提出レポートに基づくグループワーク（ディスカッションと発表）

第5回オリエンテーション：2/5@横浜	旅行会社オリエンテーション、その他最終準備状況の確認など
渡米（2/12～3/5）	アメリカ・カリフォルニア州・サンフランシスコ/バークレー地域 （滞在：Berkeley YMCA で共同生活） <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2班に分かれてのボランティア活動参加（スープキッチン/フードバンク）</li> <li>・ 全員参加のボランティア活動（植樹ボランティア）</li> <li>・ 自主学習（ゴスペル参加、NPO 突撃訪問、キャンパスインタビュー体験）</li> <li>・ NPO イングリッシュクラス（全4回）</li> <li>・ サンフランシスコ州立大学のクラス参加（Ethnic studies）</li> <li>・ 各種学習的フィールドトリップの参加</li> <li>・ 毎日のボランティアグループミーティングと週末全体ミーティングの開催と運営</li> </ul>
第6回オリエンテーション：3/24@未定	帰国後ミーティングと報告会に向けた打ち合わせ
第7回オリエンテーション：3月の土曜日	帰国後ボランティア活動への参加と振り返り：特定非営利活動法人セカンドハーベストジャパン（活動後、レポート提出）
3/24～4/17	個別カウンセリングと報告会個別発表準備期間
第8回オリエンテーション：4/18@未定	報告会個人発表予演会およびグループ発表の打ち合わせ
4/20～5/15	グループ発表準備期間
第9回オリエンテーション：5/16@未定	報告会全体予行練習と最終打ち合わせ
5月第5週@白金	報告会
6/1～6/8	報告書初稿提出期間
6/1～6/19	報告書添削期間および完成
第10回オリエンテーション：7/4@未定	最終総括

(李)